

本居宣長の儒学受容史—その京都遊学と交友を中心に

鄧楚涵

「伊勢源氏ソノ外アラユル物語マデモ、又ソノ本意ヲタヅヌレバ、アハレノ一言ニテコレヲ弊フベシ、孔子ノ詩三百一言以蔽之曰思無邪トノ玉ヘルモ、今コ、ニ思ヒアハスレバ、似タル事也。」

本居宣長が『安波礼弁』で「あはれ」を論じる文章である。物語の本意だとされる「あはれ」を説明する際、『論語』に似ていると主張するのが注目される。このみならず、その国学研究全体にわたって孔子の言論を代表とした儒学の理論や思想が息づいているのである。

そもそも国学者の本居宣長が、その青年時代に儒学教育を受けたにも関わらず、儒学者ではなく、国学者として目覚めたのは興味深い。京都遊学時代は漢学を学ぶ傍ら、国学研究に携わるようになった大事な時期である。しかしながら、この時期の宣長の思想的変化に関する考察は、今までの研究では必ずしも十分とは言えない。先行研究でよくあげられたのは、清水吉太郎という人物への二通の手紙であるが、簡潔な引用のみに終わる場合が多く、十分に重視されているとはいいがたい。本発表では、宣長が京都遊学時代に同窓へ送った書簡を検討することにより、青年宣長の孔子認識を浮き彫りにし、その中で育まれた「反儒学意識」の形成や、国学意識の目覚めとの接点を考察してみる。

具体的には、まず、寶暦七年上柳敬基宛の手紙と宝暦某年清水吉太郎宛の手紙を精読し、宣長が孔子の主張を積極的に受け入れる一面に照明を当てる。そして、同じ清水吉太郎宛の手紙から孔子に対する批判の眼差しを見出し、これは「孔子ではなく、説教への嫌悪」と指摘する。それから、清水吉太郎と絶交に至る経緯を、往来の書簡を通してたどり、二人の孔子認識の齟齬ないしは対立を明らかにする。最後に、寶暦四年草深謙光宛、寶暦五年、六年岩崎榮令宛の三通の書簡から、青年宣長の儒学認識の変化を描き出す。特に「背徳夢の体験」を宣長の独自性の兆しとして検討することで、発表を締めくくる。

青年宣長の儒学認識変遷—その京都遊学と交友を中心に

鄧 楚涵

1、研究縁起

本居宣長の儒学受容史といえ、その青年時代の京都遊学は絶対に無視できない時期である。この時期、宣長は医学を学ぶ傍ら、堀景山のもとで一般的な儒学知識を勉強していた。景山は「藤原惺窩の高弟堀杏庵の孫であり、代々藝州侯の儒官¹」ではあるが、朱子学のみならず、反朱子の別の流派も積極的に取り入れた、オープンな師匠である。宣長と契沖作品との出会いも、彼の取り計らいで実現したのである。

このような師匠のもとで育った宣長は、どのような儒教観があるのだろうか。また、この時期の、宣長の交友状況と成長はどういったものなのか。

本発表は以上の問題意識に基づきながら、宣長が京都遊学時代に同窓へ送った書簡を検討することにより、青年宣長の孔子認識を浮き彫りにし、その中で育まれた「反儒学意識」の形成や、国学意識の目覚めとの接点を考察してみる。

2、孔子ではなく、説教への嫌悪

学生である宣長は、知識としての儒学について、こういう考えを抱いている。

嗟呼、足下道學先生哉、經儒先生哉、何其言之固也、何其言之險也、不佞之於佛氏之言、〔非信而云爾也、好焉而云爾也〕好〔之且〕信之。〔大氏不佞〕不啻佛氏之言而〔爾〕好信樂之、儒〔也〕墨〔也〕老〔也〕莊諸子百家之言亦皆好信樂之²

この手紙から、青年宣長は、儒学に反するというより、これを喜んで学んだとも言えよう。しかしそれは格別の「好み」ではなく、諸子百家の学問と等しく見ているということもわかる。また、ここでは頻繁に使用されている「好信樂之」という言葉にも、孔子の影響が見られる。『論語』には「子曰、知之者不如好知者、好知者不如樂知者」（子曰く、之を知る者は知を好む者に如かず、知を好む者は知を樂しむ者に如かず）という名言がある。宣長がこの言葉を使い、自分が様々な知識が得られることを楽しく思う「樂学者」であることを宣言したのであろう。すなわち、宣長は孔子のこの言葉を身をもって受け入れたのである。

宝暦某年、清水吉太郎という景山門下の同門に宛てた書簡には、『論語・先進第十一』の内容が引用されている。

曰：「莫春者，春服既成；冠者五六人，童子六七人，浴乎沂，風乎舞雩，詠而歸。」夫子喟然歎曰：「吾與點也！」

これに対し宣長は、

不在

之意

其所樂〔非如〕先王之道、而在浴沂詠歸矣、孔子〔所與〕、斯亦在此不在彼矣、僕有〔竊〕取于茲、而至好和歌、不獨爲是、〔蓋〕性也、又癖也、〔所以足下之謂也、雖然乎〕無所見而妄好之哉³

¹ 小林秀雄：『本居宣長』、新潮社、1977年、第39頁。

² 大野晋、大久保正編：『本居宣長全集』第十七巻「寶暦七年三月某日、上柳敬基宛」、筑摩書房、1987年、第16頁。

³ 大野晋、大久保正編：『本居宣長全集』第十七巻「寶暦某年某月某日、清水吉太郎宛」、筑摩書房、1987年、第18頁。

と評した。

上記の通り、孔子の「浴沂詠歸」に対して、宣長は積極的な好意を抱いている。

但し、同じく清水吉太郎宛の書簡には、かかるものもある。

聖人之道、爲國治天下安民之道也。非所以私有自樂者也。今吾人無國之可爲焉、無民之可安焉、則聖人之道、抑何爲哉。(中略) 足下之〔好〕聖人之道、得弗〔爲〕屠龍之技乎。⁴

この文が示したように、青年宣長は、「聖人之道」は政治には有意義であることを認めたものの、自分はその布衣の身で、儒学が一般人には必要とされていないという見解を示した。続く文には、

夫孔子、距文武周公〔未〕甚遠、先王之禮樂刑政未泯、遺化尚存焉、而其道弗行、晚知其不可也、修六經、傳諸後世矣、難哉、德如其聖、時如其近、而不得〔明〕斯道於天下也、自此其後、思孟之徒、以及〔宋〕程朱諸公、皆能以先王孔子之道自任、而倨傲僻違、以驕溢人、唯辯論是美、而未嘗秋毫益乎天下焉、適足以惑俗滑和已、(至如) 此方、如伊仁齋、物徂來、亦皆不外是矣⁵

とある。上記の文から、宣長の批判の幅の広さが十分感じられる。孔子は自分の政治理想が叶わなかった失敗者ではあるが、「聖人」といえる「徳」のある人として捉えられている。その後継者の子思や孟子、ひいては宋儒の二程子と朱子、みな自ら孔子の志を受け継いだと標榜しているものの、ただの弁論家で、何の役も立たない口喧嘩で世間を惑わす人たちであった。昔の唐土のみならず、今の日本でも、伊藤仁斎や荻生徂徠などのような儒学者がいて、同じ類である。

これはたいへん破壊力のある言葉である。同じ儒学を勉強している同級生の清水吉太郎からの返信は残されていないが、宣長の彼への第二通の手紙にあるかかる言葉から、清水の反応が伺える。

足下駁曰、人而無禮義、其如禽獸何、足下讀聖人之書、而後免爲禽獸乎、亦迂哉⁶

3、清水吉太郎との付き合いとその終わり

清水と宣長は相当親しい友達であった。上柳敬基への手紙には、三人の友情が鮮明に描かれている。

且峨山堰水之勝、冠于平安、時亦暮春、惟浴沂之歎不啻、足下亡意耶、清童子數過不佞、謀會業尋盟、不佞問、韓乎柳乎、將文選乎、清童子唯云、選可矣、足下之意亦在文選乎⁷

ここに記されたのは、「清童子」と呼ばれる清水吉太郎（清水は若くて、まるで子供だから「童子」という愛称がつけられた）が、何度も宣長の所に通い、上柳と三人で一緒に孔子の「浴沂詠歸」に倣い、春の暮れにどこかへ「文学の旅」に出かけようと相談した話である。青年宣長の行為には、孔子の倣いが見えるだけではなく、唐の韓愈と柳宗元の散文や、梁・昭明太子の『文選』にも非常に親しんだ宣長像が伺える。

しかし親友だった清水が、宣長の歴代儒学大家に対する猛烈な批判に対し、「人而無禮義、其如禽獸何」と、『礼記』の「今人而無礼、雖能言、不亦禽獸之心乎」を踏まえた言葉で宣長に反発した。礼の知らな

⁴ 大野晋、大久保正編：『本居宣長全集』第十七巻「寶暦某年某月某日、清水吉太郎宛」、筑摩書房、1987年、第18頁。

⁵ 大野晋、大久保正編：『本居宣長全集』第十七巻「寶暦某年某月某日、清水吉太郎宛」、筑摩書房、1987年、第18頁。

⁶ 大野晋、大久保正編：『本居宣長全集』第十七巻「寶暦某年某月某日、清水吉太郎宛」、筑摩書房、1987年、第21頁。

⁷ 大野晋、大久保正編：『本居宣長全集』第十七巻「寶暦七年三月某日、与柳敬基」、筑摩書房、1987年、第15頁。

い人は、喋りはできるけど、その心は禽獣のと同じだ、と言っているのである。これはまさに、教養のある学者が発する限りの、最も激しい言葉である。

そして宣長は「迂闊だ」と返事した。宣長は一人の頭の固い青年に対し、心が痛んでいるのか、はたまた当てこすりなのか。恐らく前者であろう。清水への手紙きには、さらにかかる言葉が続く。

足下之好〔聖人之道〕、將開肆下帷、教授生徒、嚮道而誘譽、蘄名（以誇張於世）耶、亦小矣哉、〔夫〕聖人之道、安天下之道也、非所以開肆下帷、教授生徒、嚮道而誘譽、蘄名以誇張於世者也、夫如是、足下之〔好儒〕聖人之道、抑何爲哉⁸

あなたは聖人の道をもって何をするのか、教室の一軒でもつくって、学生に教え、世間で名だたることを願っているだけか。聖人の道は天下安泰するためのもので、そういうものではない、それを習って何ができる、と苦心する宣長であった。

残念なことに、この手紙を受けた清水の反応は今では全く分からない。恐らく宣長のひどい皮肉しか感じなかったのであろう。その後、宣長から彼への手紙もなくなった。袂を分かったに違いない。清水だけではない。京都を離れた宣長は、京都遊学時代のすべての友人と連絡を断ったのである。

また、上記から宣長の現実生活の中に出会った儒学者たちへの批判も明らかである。たかが教師役なのに、孔子の志を受け継いで天下を治める力があるなど大げさな言葉で名をあげることを図っている。宣長はこのような人間に嫌悪を覚えた。

ただ、「聖人の道」に身を尽くしたい青年・清水から見ると、宣長の手紙は自分の理想への侮辱であり、自分の憧れた人たちへの悪意であるにしか思えないだろう。

4、手紙からみえる青年宣長の変化

ところが、京都についた最初のとき、宣長はそういう「屠龍之技」が嫌いではなかった。宝暦四年草深謙光への手紙には、「嘗聞、上醫々國、金匱三世、加以稽古、則十全之功、不容疑也。」⁹と書いてある。この時の宣長は、卒業して旅立った同窓に、「一番の医者は国を癒す」という信念で励ましあっていた。また、儒学伝統的な価値観のもとで、「十全之功」を立てろうと志がまさに旺盛な時期である。

しかし、翌宝暦五年、宣長はセックスの夢を見た。

僕亦有夢。窈窕叔女。齡垂許嫁。妍麗殆不可言。緩步至僕旁矣。……妾獨至君所。又有微意。……叔女微笑。稍近僕。謂曰。君再拜稽首。何所施乎。妾不欲。止矣止矣。僕益敬畏。退坐。叔女微怒曰。君厭妾也。何其甚乎。不意。遠來為君所忌。……其妖艷、譬如櫻花帶霞。……僕不得已於其情之切也。乃執其手子。引入臥内。不可言者。……叔女殷勤惜別。僕亦不忍離別。對坐泣淚相看。相誓曰。莫作浮萍逐浪不知廻。乃辭決。¹⁰

25歳の青年には、かかる夢があるのも珍しくないが、引用の文に「櫻花帶霞」という形容詞に注目されたい。伝統的な漢文では、花や霞で美人のなまめかしさを形容することは少なくないが、「櫻花」でなく、「桃花」のほうが圧倒的に多い。この文章を漢文で書いた宣長は、実生活に現れた桜花から美人のような美しさ共感したのか、または何らかの和文学に影響されたのか、いづれにせよ、日本の色彩に帯びた自意識のある文である。

⁸ 大野晋、大久保正編：『本居宣長全集』第十七巻「寶暦某年某月某日、清水吉太郎宛」、筑摩書房、1987年、第18頁。

⁹ 大野晋、大久保正編：『本居宣長全集』第十七巻「寶暦四年九月五日、草深謙光宛」、筑摩書房、1987年、第5頁。

¹⁰ 大野晋、大久保正編：『本居宣長全集』第十七巻「寶暦五年某月某日、岩崎榮令宛」、筑摩書房、1987年、第7-8頁。

また、原文が長いので省略するが、夢の中の美人は建禮皇太後の侍女で、今回は内府君の命で、堀一門の弟子たちに慰労しにきたという。老臣主馬判官という人物が各学生の所に回ることになったが、その美人は秘かに「僕」のところに来た。そして情熱的な告白をし、なぜ堀一門ほかの学生を選ばなかったのか、その理由を述べた。ただし、美人が選んだ「僕」は、どうも本居宣長ではなく、この手紙の宛先である岩崎榮令のようである。「獨岩崎子。風流雅尚之士。欲屬之。」¹¹そして一夜の契りの後、主馬判官に見つかり、やむを得ず別れた。別れの際二人は、決して帰らない浮草にはならず、いつかまた相手のところに帰る、という誓いを交わした。

なぜここまで細かくこの夢を記述したかという点、これは、青年宣長の性的体験だけでなく、反道徳的体験といえるという点に注目されたい。学生の身の「僕」（岩崎か宣長かはさておき）は、権力者の侍女と密通した。儒学的には認められない一夜の契り、ついに道徳や権力の代表者、老臣主馬判官によって発覚されたのである。この手紙には、儒学に反発する言説は一切ないものの、情を妨げるものへの抵抗心の種が見えてきたのである。

また、「僕」は最初、美人の求愛に対し、恐る恐るした態度で、それを素直に受け入れることが怖かった。美人の怒りや交流の深めにより、ようやくこれを受け入れるようになったものの、「不得已」、やむを得ずという言い訳をした。しかし別れがきた際、素直に「不忍離別」、涙を流した。この過程も、道徳のしきたりに囚われた儒学生が、自己解放を遂げたプロセスともいえよう。

この夢などの刺激により、性や道徳に解放体験を得られた宣長はとうとう、翌宝暦六年では、嶋原という京都の遊郭に耽るようになった。「初執道學者。是僕之素心。而非變也。至依莊子。始可謂變已。終流鄭聲。是再變也。」¹²と本音を吐露した。

「鄭聲」というのは、中国殷周時代の中原地域にある鄭国の音楽や詩歌のことで、『論語』では、「鄭声淫」という孔子の態度が記録されている。もちろん音楽としての「鄭聲」は、宣長が聞いたことがあるはずもない。宣長がここで言いたいのは、自分はもう「みたらな」ことに浸っていることであろう。要するに、もはや「道学」や道徳の対立面に立っていると言い張っている。

同じ手紙に、宣長は友人岩崎に嶋原遊郭の位置、景色、遊女の仕事ぶりなどのよさを全面的にアピールし、「少年應分。而取其宜。從容佚樂於其中、則謂之真樂」¹³と、少年である私たちはまさにここで本当の楽しさを見つけるべきだと主張している。

その後、宣長はもう一件小話を記録した。自分は岩崎の言う通り服装を変えたが、愛人である「妓君」がその姿を見て、泣きながら、「なんでそんな姿をしているの」と聞いた。宣長は「とある人から戒めを受けたから」と答えた。そこで遊女は怒って、「その人は狂気で坊主臭のある人です。私のかわいい君に悪いことを教えたのです。あななはもともとあなたのほうがいいです」と言った。

このことを自慢そうに岩崎に誇っている宣長は、手紙の最後にかかる言葉を残した。「夫以人生少年之至樂。莫如爲婦女所悅。而盡交情。結偕老之契也。」¹⁴という。

人生若いうち一番楽しいのは、女に喜ばれ、一緒に老いていく契りを結ぶことにあると言い張っている青年宣長。その後、京都堀一門にはいるものの、前記のような、反儒学的な手紙を通じて、同門との弁論を繰り広げたのである。この時期の遊郭体験は恐らく、青年宣長の転向における一要因として捉えるべきであろう。

¹¹ 大野晋、大久保正編：『本居宣長全集』第十七巻「寶暦五年某月某日、岩崎榮令宛」、筑摩書房、1987年、第8頁。

¹² 大野晋、大久保正編：『本居宣長全集』第十七巻「寶暦六年正月某日、岩崎榮令宛」、筑摩書房、1987年、第10頁。

¹³ 大野晋、大久保正編：『本居宣長全集』第十七巻「寶暦六年正月某日、岩崎榮令宛」、筑摩書房、1987年、第11頁。

¹⁴ 大野晋、大久保正編：『本居宣長全集』第十七巻「寶暦六年正月某日、岩崎榮令宛」、筑摩書房、1987年、第12頁。